

## 第27回「日本絵本賞」選考報告



松本 猛

(第27回「日本絵本賞」最終選考委員長)

4月22日、第27回「日本絵本賞」(主催：(公社)全国学校図書館協議会、協賛：(一社)松岡マジック・ブック・ヘリテージ、特別協力：読売新聞社、中央公論新社)の最終選考会が行われ、4点の授賞作品が決定した。

第27回は、2021年1月から12月までに刊行され、全国SLA選定委員会で選定された絵本989点(うち翻訳絵本304点)のうち、全国SLA絵本委員会によって選ばれた「第27回日本絵本賞最終候補絵本」30点(うち翻訳絵本9点)が対象となった。

最終選考会では、5名の最終選考委員による事前審査を基に、討議と投票を行った結果、「日本絵本賞大賞」には、『たまごのはなし』、「日本絵本賞」には、『おすしやさんにいらっしやい！：生きものが食べものになるまで』『はるのひ：Koto and his father』の2点、「日本絵本賞翻訳絵本賞」には『夜をあるく』が選ばれた。

### 日本絵本賞講評

大賞の『たまごのはなし』は“絵本は子どもの本”という概念を超えて、大人を魅了する新しい絵本のスタイルを出現させたことが評価された。この絵本が醸し出すアイロニーとユーモアは、さまざまな矛盾を抱えて生きる現代人にとって媚薬のような効果があるのかもしれない。ハンプティ・ダンプティを思わせる主人公の卵とマシュマロのペアは、キッチンから脱出して家の中を徘徊する。鉛筆の繊細な陰影を駆使して描かれた絵を、セピアをベースにイエローとブルーの特色を使って印刷したこの絵本は、柔らかさと静けさに包まれている。画面の静謐さとは裏腹に、卵は植木鉢やクッションや時計をからかい、時には暴力的ともいえる仕業で、相手を黙らせていく。たがいの形の違いをあげつらうナッツに対しては、粉にしてハチミツで練って型

に入れればみんな同じになる、と言い放つ。虫の居所が悪いと言ってナッツのところに出かけていった卵はハチミツをかけて、怒る彼らをぐちゃぐちゃにして黙らせてしまう。この乱暴この上ない場面も、その後に続く窓ガラス越しに雨がやんでゆく室内の場面も、ひたすら静かで美しい。この絵本は

〈第27回日本絵本賞大賞〉



『たまごのはなし』  
しおたにまみこ/作  
(ブロンズ新社)

人間の心理の複雑さや理不尽さを、画面と言葉のギャップを絶妙に使いながら映像詩のように表現した。

『おすしやさんにいらっしやい! : 生きものが食べものになるまで』は魚類の科学絵本であり、すしの料理絵本であり、子どもたちの表情が魅力的な写真絵本である。表紙は、すし職人がカウンターに座る子どもたちに大きく口を開けたキンメダイを見せている写真で、一人ひとりの表情が実に生き生きとしている。見返しは子どもたちが手をつないだり肩を組んだりしながら商店街を歩いている姿で、ページをめくるとカウンターの向こうか

(第27回日本絵本賞)



『おすしやさんにいらっしやい! : 生きものが食べものになるまで』  
おかただいすけ／文、遠藤宏／写真  
(岩崎書店)

(第27回日本絵本賞)



『はるのひ : Koto and his father』  
小池アミイゴ／作・絵  
(徳間書店)

(第27回日本絵本賞翻訳絵本賞)



『夜をあるく』  
マリー・ドルレアン／作、よしいかずみ／訳  
(BL出版)

ら「ヘイ！ いらっしやい！」と板前さんが笑顔で迎える。絵本の設定は、子どもたちがすし屋を訪ね、キンメダイとアナゴとイカのさばき方を目の当たりにしながら、握りを食べて満足するというストーリーである。解剖の授業は面白くなくても自分たちが食べるすしネタの魚となれば興味がわく。子どもたちの発する感嘆の言葉を組み込みながら、それぞれの魚の特徴をわかりやすく、臨場感あふれる言葉で説明していく。思わず引き込まれる写真と巧みな画面構成の力で絵本は一気呵成に最後まで読ませる。しかし、実際にはこの絵本は周到な計画と、緻密な編集技術で作られている。語り手(文)は写真のすし職人であり、魚を釣る写真、胃袋の内容物や魚の各部の写真など、子どもが登場する場面とは別撮りの写真ははじめ、膨大な写真から選ばれたものが実に自然に構成されて、一編の物語に仕上げられている。この本の魅力は、企画力と写真の魅力と編集の技術が見事に一体化したところにある。

『はるのひ : Koto and his father』は夕暮れが迫る春の畑と鎮守の森を舞台にした、男の子の小さな冒険談である。畑でお父さんの手伝いをしていた子どもが遠くの森の向こう

に煙を発見して見に行く。畑のあぜ道を走りながら、ときどき振り返ってはお父さんに「おーい」と声をかけ、返事があることで安心して煙に向かって進む。暗い森に入り不安になっても、お父さんの声が小さく聞こえると勇気づけられてついに森を抜ける。たき火を見つけ火が消えるのを見届けたとき、辺りはすでに暗くなっている。不安にかられながらも森に向かって「おーい」と声をかけると森が「おーい」と返事をして、お父さんが現れる。最初の画面で、物語

が展開する風景が示され、画面が展開するごとに、男の子の進んだ位置がわかり、呼び交わす声で距離感や子どもの心理が伝わってくる。エンディングも見事だ。おおらかなタッチと、光の変化を細やかにとらえながら豊潤さを感じさせる色調は、日本の農村の美しさ、親子のほのぼのとした心の絆をつたえる。

翻訳絵本賞の『夜をあるく』は、夜中に家を出て近くの山に登って、朝日が昇る瞬間までの家族4人の小旅行を追った絵本である。ラストシーンまで続くダークブルーの画面に描かれる光の表現が美しい。それは真っ暗な子ども部屋のドアから差し込む光に始まり、門灯や街灯、ホテルや家や、遠くに見える列車の窓の光、そして自然界の星や月の光に移っていく。この光の展開のリズムを主旋律と

すれば、ダークブルーの階調で描かれた背景はオーケストラの響きのように画面に厚みを加えている。自然の風景はもちろん、家族の周りに描かれる暗がりの中の建物や動物や木々や岩の表情も興味深い。さらに、暗いからこそ研ぎ澄まされる感覚は文章の中にも表現されている。それは虫の音やカエルの声や、枝が折れたり、葉が揺れる音だったりする。花の香りや、湿った苔や木の皮の匂いにも、道に残る昼の暖かさにも気づかされる。夜の魅力をあらためて認識させられる絵本である。

選には漏れたが『ハナはへびがすき』（蟹江杏／作、福音館書店）にも高い評価があり、次作に期待するという声が多かった。

（まつもと・たけし＝絵本・美術評論家、ちひろ美術館常任顧問、横浜美術大学客員教授）

#### 選評（第27回日本絵本賞最終選考委員）

#### ●伊藤たかみ



大賞の『たまごのはなし』の絵は新しい魅力にあふれていて、眺めているだけでも楽しい。コミカルでレトロで、どこか寂しげ。これが全体の毒とよく混じり合っているいい味を出していた。一方で『はるのひ：Koto and his father』は、大胆で素朴な絵柄が味わいの作品。少年の心細い心情がしみこんでいて、ゆっくりと中身のよさがにじみ出してくる。

海外作品『夜をあるく』に描かれる明かりの表現は、暗闇が美しいからこそ。文字通り、目が吸い込まれてしまいそうになった。

食育と生物の授業をおすし作りでやってみ

せた写真絵本『おすしやさんにいらっしゃい！：生きものが食べものになるまで』は、この取り合わせが新鮮だ。食べるところまでしっかり楽しむ子どもたちが生き生きとして、とてもよかった。

（いとう・たかみ＝作家）

#### ●福田美蘭



『たまごのはなし』の微妙にイラッとするたまごの言動には、読む側の神経をつかんで離さない現代の不条理な空気が満ちている。

その無敵な表情と残酷さの中に、複雑な今の対人関係を写し込んで、物語に底流する類廃的・暴力的・怒りといった感情に、強く反応せざるを得ない現代人の心に響く衝撃力がある。『おすしやさんにいらっしやい！：生きものが食べものになるまで』は子どもたちのしぐさや表情が自然体で、話のテンポや画面構成も力強く、ワクワクする話の中に生きものの視点も自然に組み込んで秀逸。『はるのひ：Koto and his father』は素朴な絵の筆致が薄暗さの中を進むスピードとなって、少年の感覚的なものをじかに伝えてくる。『夜をあるく』は日の出の美しさの感動は国を超えて共有できるという視点に、翻訳絵本としての魅力があった。

(ふくだ・みらん＝画家)

## ●小塚昌弘



今回の候補作はオーソドックスなものから写真絵本まで、個性のはっきりした作品がそろった。大賞の『たまごのはなし』はハンブティ・ダンブティをモチーフにした卵のお話。ダークなユーモアにあふれ、独特な質感の鉛筆画に淡彩をほどこした絵柄は不思議な魅力がある。写真絵本の『おすしやさんにいらっしやい！：生きものが食べものになるまで』は出版社の企画力を感じさせる1冊。220mm×286mmという横長の判型を生かした魚の写真は迫力がある。『はるのひ：Koto and his father』は一見素朴な作風だが、主人公の少年の心象に応じた背景の変化や父親との呼び交わしが効果的な、よく作り込まれた作品。

翻訳絵本はブルーの夜景が印象的な『夜をあるく』が受賞した。

(こづか・まさひろ＝読書推進運動協議会事務局)

## ●小林 功



『たまごのはなし』は色味を抑えた緻密な描画で独自の世界を作り出している。上から目線でシニカルな言葉を繰り出すたまごはなぜか憎めない。小気味よい毒気が癖になる。

『おすしやさんにいらっしやい！：生きものが食べものになるまで』では魚がすしになるまでにいくつもの発見があり、わくわくする。作中の子どもたちの表情がよい。

『はるのひ：Koto and his father』は森の中での不安な気持ちや帰り道の安心感、小さな冒険のあとの満足感など主人公の感情の起伏に共感する。

『夜をあるく』では暗闇と静寂の中でふだん見過ごしているものに意識が向けられる。そして迎えた夜明けの美しさに言葉を失う。何かすばらしいことが始まりそうな余韻を残した結末には脱帽。

このほか『海のアトリエ』（偕成社）、『すてきなひとりぼっち』（のら書店）、『ふしぎな月』（理論社）、『すうがくでせかいをみるの』（ほるぷ出版）がよかった。

(こばやし・こう＝全国学校図書館協議会絵本委員会委員長)